

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 4 日現在

機関番号：34304
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2017～2020
 課題番号：17K02567
 研究課題名(和文) 海洋国家アメリカの文学的想像力：アメリカン・ルネサンスと日米を結ぶ19世紀の言説

 研究課題名(英文) A Study on Literary Imagination and Maritime America: The Nineteenth Century Naval Discourse shared in the American Renaissance and Japan–U.S. Relations

 研究代表者
 中西 佳世子 (NAKANISHI, Kayoko)

 京都産業大学・文化学部・教授

 研究者番号：10524514

 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では19世紀の海洋国家としてのアメリカの側面に注目し、ナサニエル・ホーソン作品とマシュー・C・ペリーの艦隊記録を中心に、海軍言説と文学との結びつきを考察した。複数の研究者による論集『海洋国家と文学的想像力 海軍言説とアンテベラムの作家たち』では個別の作家に注目するだけでは見えてこない19世紀の海軍ならびに海軍言説と文学との多角的な関係性が可視化された。またアメリカ海軍の艦上劇で行われた minstrel show の文化的意義という問題の重要性が浮上した。アメリカ特有の人種差別的なショーが日米和親条約締結後に日本人に披露されたことの文化的意義を明らかにすることが新たに獲得した科研費研究課題となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本科研費では日米交流に影響を与えた19世紀の言説を読みとく視点として、海洋国家として発展するアメリカの海軍と作家達との関係性に注目した。日本が開国時に接したのはアメリカ海軍であり、海軍特有の言説によって演出されたアメリカであったと言える。本研究は日本開国時に披露された人種差別的なアメリカン・エンターテインメントの文化的意義の考察という研究に繋がった。日米交流の原点における文化的接点を考察する本研究は19世紀のアメリカ文化・文学研究に留まらず現代に繋がる新たな視座を提供するものである。

研究成果の概要(英文)：This study, focusing on the characteristics of the U.S. as a maritime nation in the nineteenth century, examined the connections between naval discourse, literature, and culture, especially in Nathaniel Hawthorne's works and the records of Commodore Matthew C. Perry's fleet. Literary Imagination of Maritime America: Naval Discourse and Antebellum Writers, a collection of essays by several scholars including myself, outlined the multifaceted relationships between the navy, naval discourse, and literature, which cannot be holistically discussed simply by focusing on any one individual writer. This study also novelly raised the cultural significance of the minstrel shows on American naval ships. The cultural significance of these minstrel shows, a racist performance unique to the U.S. that was presented to the Japanese after the enactment of the Treaty of Amity between Japan and the U.S., is the subject of the newly acquired KAKENHI.

研究分野：19世紀アメリカ文学・文化

 キーワード：アメリカン・ルネサンス ナサニエル・ホーソン 日本遠征 マシュー・C・ペリー 文学的想像力
 ミンストレルショー 海軍言説

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

この研究の発端はアメリカン・ルネサンスの代表的作家であるホーソン作品に多用されている「プロヴィデンス(神の摂理)」に注目してテキスト分析を行った筆者の博士論文に辿ることができる。博士論文では、プロヴィデンスという概念の宗教的意味に加え、その語源が有する「予見する」という属性によって生み出されるアイロニーなどの文学技法がホーソン作品でどのように用いられているかを考察した。また作家の長編創作におけるテーマと技法とプロヴィデンスの概念がどのように関わるかを明らかにするとともに、19世紀の政治言説である「明白な使命」とプロヴィデンスとの関連にも注目し、作家の政治・社会への問題意識についても論じた。

この流れの中で筆者はホーソンの代表作である『緋文字』とマシュー・C・ペリーの日本遠征記録における彗星をめぐるプロヴィデンス言説の類似性に関心を持って研究を進め「浦賀の黒船が見た天空の緋文字 ホーソンとペリーのプロヴィデンス」とする論考にまとめた。ここではアメリカン・ルネサンスと日本開国の共時性に注目し、文学と政治を結ぶプロヴィデンス言説という視点からホーソンとペリーの関係性を論じた。具体的には、日本開国という国家事業を成功させたペリーが帰路にリヴァプールで領事をしていたホーソンを訪問して日本遠征記録の編纂を依頼した背景について、歴史とフィクションの交錯という視座から考察したものである。日本遠征記を単なる海軍遠征の報告書ではなく「ナラティブ」としてフィクション的要素を加味したいというペリーの思惑、ホーソンと時の大統領フランクリン・ピアス(ホーソンの大学の同窓)との関係性、プロヴィデンス言説と日本遠征の大義に言及したこの論考は平成24年に『アメリカ研究』第46号に掲載され、その後、彗星に関する章を加えた論考が論集『アメリカン・ルネサンス 批評の新生』(開文社出版、2013年)に収録された。

一連の研究の中で、筆者はさらにホーソンと海軍の繋がり、ならびに19世紀アメリカにおける海軍言説に注目することになる。イギリスから独立したアメリカは自国海軍によるアメリカ商船などの保護を図る必要があったが、国内では海軍不要論も根強くあった。国家の言説と海軍の言説は必ずしも一致していたわけではない。ホーソンが編纂したペリー率いるアフリカ艦隊の記録『アフリカ巡航日誌』にも国家と海軍間の軋轢が見え隠れする。日本が最初に接したアメリカとはアメリカ海軍であることに鑑みると、その交流の文化的側面を考える際に海軍言説への視点は欠かせない。こうした問題意識が、本研究のテーマ「海洋国家アメリカの学的想像力:アメリカン・ルネサンスと日米を結ぶ19世紀の言説」へと繋がった。

2. 研究の目的

本科研費では日米交流に影響を与えた19世紀の言説を読みとく新たな視点として、海洋国家として発展するアメリカの海軍と作家達との関係性に注目した。19世紀中葉の海洋は捕鯨船、海賊船、奴隷船などが交錯する場であり、海軍はそのいずれとも接点を持っていた。海軍は秩序化を図る任務を負っていたが海軍も制度化の途次であり、あらゆる制度の境界は曖昧であった。この転換期のダイナミズムはホーソンのような海軍と接点のあった作家の想像力に訴え、ペリーなどが率いる艦隊の海軍言説にも影響を与えた。日本が開国時に接したのはこうしたダイナミズムに揺れ動くアメリカ海軍であり、その海軍言説によって演出されたアメリカであったと言える。本研究では、これまで関心が向けられなかったこれらの点に注目し、海洋国家アメリカの海軍言説と文学的想像力との関係性を考察することを目的とした。

3. 研究の方法

1) 19世紀のアメリカ海軍の寄港地など関連地での現地調査 2) ナサニエル・ホーソンと海軍に関する作品、資料の精読 3) 学会発表と成果物の刊行

1) 19世紀のアメリカ海軍の寄港地での現地調査

日本遠征時にペリー艦隊が駐留した香港を訪問し、香港歴史博物館と香港海事博物館で、研究課題に関するアヘン戦争前後の香港の資料調査を行った。ペリーは1853年と1854年の二度の日本訪問の際に香港に立ち寄っている。特に二度目の江戸湾訪問の前、香港のクーロン港やピクトリア港に停泊中、ミシシッピ号とポーハタン号で艦上劇を開き、香港在住の上流階級の人々を招いている。香港で印刷機を積み荷に加え、上演ピラをまいて本格的に観客を呼び込む艦上劇は、単なる船員の娯楽ではなく、音楽や劇を日本開国の「文化的兵器」とするための予行演習でもあった。また、ペリーはアヘンを日本に持ち込むことを厳しく禁じたが、アメリカ商人は香港でのアヘン貿易で莫大な利益を得ていた。香港歴史博物館と香港海事博物館では、この時代に港に出入りするアメリカ軍艦の様子や、アメリカ商人によるアヘン取引書などが展示されており、後進国であったアメリカが西欧列強に交じり、頭角を現しつつある様子がみてとれた。ペリーは横浜、下田、函館で艦上劇を開催し、日本人を招くが、そこで演目に選ばれたのは香港で人気を博した minstrel show などであった。イギリスの上流階級の人々の住居や総督邸があるピクトリアピークにつながる高台では、このペリーの艦上劇に招かれた人々の風俗を垣間見ることができた。初めて日本が接したアメリカとは、海軍によって演出されたアメリカであったが、ペリーがその演出の準備を行ったクーロン港やピクトリア港を訪れ、開国時の日本との接点を感じ取ることができた。

19 世紀のアメリカ海軍の拠点であったハワイのオアフ島を訪問しハワイ大マノア校図書館、ミッションハウスミュージアム、真珠湾アリゾナ記念館、戦艦ミズーリ記念館などで資料収集と調査を行った。ここでは ハワイの 19 世紀の新聞に「 minstrel show 」の広告が記載されていること ハワイのプロテスタントのミッショナリーにおいて音楽と印刷機が宣教の道具となったこと 太平洋戦争終結の「日本降伏調印式」の場となった戦艦ミズーリでは日米関係の再構築のシンボルとしてペリー来航時の星条旗が使われたことを確認した。日本支配に先立つハワイ植民地化における文化支配でもエンターテインメントが重要な役割を果たしている。本研究課題では「日本開国の鍵はエンターテインメントにある」とするペリーの演出に注目してきた。真珠湾の戦艦ミズーリには 1945 年の日本降伏調印式で用いられたペリー提督の星条旗が展示されているが、日本開国時のペリー海軍言説に基づく政治的・文化的演出が太平洋戦争終結時に再現されたと言える。ペリーのアフリカ艦隊では、白人が黒人に扮して演じる minstrel show が乗組員の娯楽として行われているが、それから 10 年後の日本遠征において、ペリーは日米和親条約の締結が決まると幕府の役人をポーハタン号に招待して艦上劇を披露した。そのエンターテインメントの演目もまた minstrel show である。前述したように、この minstrel show は香港でも行われている。19 世紀のアメリカ海軍は各地で艦上 minstrel show を行っていたことが分かるが、黒人差別に根差す笑いを共有することで連帯感を醸成しつつ、一方で白人と有色人種を決定的に区別する植民地的な仕組み作りによりエンターテインメントが果たした役割に注目することが本研究の新たな展開の可能性に繋がるという示唆を得た。

16 世紀に慶長遣欧使節団を派遣した仙台藩は、幕末においては遣米使節団（1860 年）の人材を輩出し、また本邦初の『日本遠征記』翻訳を残している。本調査では宮城県図書館と仙台市博物館で、『航米録』と『英単語集』（玉蟲左太夫）のマイクロフィルム、『英文翻譯彼理日本紀行 10 巻』（大槻文庫）のアーカイブ、大槻盤溪と玉蟲左太夫に関する論文など、日米を繋ぐ 19 世紀言説を考察する資料を入手した。ペリー来航後の 1860 年に日米修好通条約の批准の為に派遣された使節団の一員であった玉蟲左太夫はオアフ島の海軍基地にも立ち寄っている。また、仙台市博物館では、1853 年に小笠原の土地をペリーが購入したことで小笠原の領有権について日米間で議論が起きた際に、ペリーが小笠原を日本の領土とする根拠とした仙台藩の林子平『三国通覧図説』のフランス語版の資料を閲覧した。仙台藩で海洋に関わる資料の編纂や翻訳が行われた背景には、伊達政宗が慶長年間に支倉常長をメキシコ、キューバ、ローマに派遣した伝統があると思われる。罪人として没した林子平は明治年間に名誉の回復がなされ、またバチカンに残された支倉常長にローマ市民権を認める文書などは 2013 年に世界遺産に登録されたが、こうした文化背景への目配りも、19 世紀の海軍言説と日米交流の接点を考察する本研究の広がりが必要であることを認識した。

2) ナサニエル・ホーソンと海軍に関する作品、資料の精読

アフリカ艦隊のペリーの旗艦船サラトガ号に同行したブリッジの『アフリカ巡航日誌』（ホーソン編纂）の翻訳準備を、中央大学の高尾直知氏、東京海洋大学の野野美砂氏とともに進めた。翻訳の精査に加え、『Historical Dictionary of Liberia, African Repository』などの資料を用いて、アフリカの地名やリベリア植民地の史実の検証ならびに注の編纂を進め、また解題執筆にむけての資料の読み込みも並行して行った。また前述の調査旅行で得た資料の読み込みも順次行ってきた。

3) 学会発表と成果物の刊行

2017 年 12 月に単著『ホーソンのプロヴィデンス 芸術思想と長編創作技法』（開文社出版）を出版した。プロヴィデンスの概念が彼の芸術思想の根底をなしており、作品のテーマと手法に深くかかわっていることを総括的にまとめた単著である。英文博士論文におけるテーマと構成を厳密に踏襲しているが、今回の和文における刊行に際しては大幅な改訂と加筆を行った。特に書き下ろしの第 5 章は政治とプロヴィデンスの概念との関係性を論じるものであり、海軍とホーソンとの関係を考える上からも本科学研究費でのテーマと直接かかわる内容となっている。

2018 年 4 月に本研究の中心的成果となる論集『海洋国家アメリカと文学的想像力 海軍言説とアンテベラムの作家たち』（共編著、開文社出版）を上梓した。筆者収録論文では『アフリカ巡航日誌』を取り上げ、ホーソンの海軍との関係、ペリーの文学的素養に注目して両者の接点を探った。本論集は 19 世紀中葉の海洋の秩序化を図る海軍言説をテーマとしたものである。11 名のアメリカ研究、アメリカ文学研究者がそれぞれの専門分野について海洋をめぐるアメリカ海軍、言説、文学的想像力をテーマに精密に論じるものだが、全体としては本研究テーマを俯瞰的に捉えるものとなっている。なお、本書の書評（竹内勝徳著）が『アメリカ文学研究』第 56 号に掲載され、それに伴い、本書の共編者である林以知郎氏との共著による英文サマリーが『The Journal of the American Literature Society of Japan』の第 18 号 (pp.98-100) に収録された。

2019 年 9 月に『精読という迷宮 アメリカ文学のメタリーディング』（共著、松籟社）に収録の「手堅い現金」と「泡のごとき功名」 ホーソンの創作と報酬」を出版した。本論考は 2017 年 8 月に日本ナサニエル・ホーソン関西支部研究会で「ホーソンの屋敷と“the solid cash”

“Peter Goldthwaite's Treasure”を中心に」をテーマに行った研究発表をもとにしている。デビュー時に親友の海軍士官ブリッジから受けた金銭的援助に対する恩義をホーソンが作品に描き込んでいることを考察したもので、海軍に関わる政治職を得ることを作家がどのように

創作活動の中に位置付けていたのかを論じた。

編集作業そのものが本研究に関する新たな視座、他の研究者の知見を得る手段となったことから、以上の研究成果物を研究の手法に含めた。

4．研究成果

成果物については研究の方法に記載した。本研究の成果は海洋国家としてのアメリカの側面に注目し、海軍言説と文学・文化との結びつきと日米交流の原点にある文化的性質を考察したことにある。特にナサニエル・ホーソーンとマシュー・C・ペリーの関係性に注目してきたが、筆者の論考を含む複数の研究者の論文を収録した『海洋国家と文学的想像力 海軍言説とアンテベラムの作家たち』は、個別の作家に注目するだけでは見えてこない19世紀の海軍ならびに海軍言説と文学との関係性を可視化した。またこの研究から、アメリカ海軍の艦上劇で行われたミンストレルショーの文化的意義という問題が浮上してきた。19世紀アメリカ特有の人種差別的なミンストレルショーが日米和親条約締結後の友好行事において、日本人に初めて披露するアメリカ文化として選ばれたことの意義を明らかにすることが新たに獲得した科研費での課題となる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計4件

1. 著者名 中西佳世子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 339 (pp.57-80)
3. 書名 共著『精読という迷宮 アメリカ文学のメタリーディング』	

1. 著者名 中西佳世子・林以知郎編著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 開文社出版	5. 総ページ数 336
3. 書名 海洋国家アメリカの文学的想像力 海軍言説とアンテペラムの作家たち	

1. 著者名 中西佳世子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 開文社出版	5. 総ページ数 290
3. 書名 ホーソーンのプロヴィデンス 芸術思想と長編創作の技法	

1. 著者名 高野 泰志、竹井 智子、中西 佳世子、柳楽 有里、森本 光、玉井潤野、吉田 恭子、島貫 香代子、杉森 雅美、水野 尚之、四方 朱子、山内 玲	4. 発行年 2021年
2. 出版社 松籟社	5. 総ページ数 344
3. 書名 テキストと戯れる	

〔産業財産権〕

〔その他〕

2021年1月23日号4頁『図書新聞』書評
書評対象書籍：高尾直知著『嘆きはホーソンに良く似合う』（中央大学出版部、2020年）

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------